

③

海外派遣軍司令部外交官附屬多
本者職員中適者大本官附命

外務省

5-1219

0020

皇認
友

第五卷

明治廿七年九月三日
同 年 月 日
日起草
日發遣

高明

主任

皇認

皇城

皇命全權使高島達介殿

皇務大臣高島達介殿

今福山島陸軍大務の朝鮮と江原等地方

昔者皇公使館を記名山村嘉吉等より其地に出

外務省

張中丞より古くよりシラシラ皇使館同大務に随行せし

事際公使館に権限由儀等事務の取扱

サ又一二事際を於て西島との關係又ハ公法上

問題等事に因り大務に御関心と應せしメ其旨を皇

公使館より皇公使館に御関心と應せしメ其旨を皇

公使館より皇公使館に御関心と應せしメ其旨を皇

公使館より皇公使館に御関心と應せしメ其旨を皇

公使館より皇公使館に御関心と應せしメ其旨を皇

急

管

查

號二二九第受

明治七年十月一日發受

主務 陸軍省

通商局

臨人進第三二九号

今用之事事者之案し海外、派員ノ事司

令教、等々、外交官ヲ付屬せしむルノ必要ヲ感シ其旨

其者、疎多中、一、若者之若、不、極、日、名、丈

以、撰、定、大、本、等、付、被、今、亦、生、極、決、計、以、及

照會書也

且、予、也、張、者、者、大、臣、ノ、面、合、ニ、持、上、其、者、荒、川

小、村、郵、ノ、三、石、ハ、既、ニ、以、内、海、富、ノ、由、并、為、以、多、考

中、保、生、且、以、今、亦、全、辦、之、上、人、名、是、也、決、計、也、也

明治七年十月一日

陸軍大臣 陸奥宗光 代理

陸軍次官 児玉源太郎



陸軍省

外務大臣 児玉源太郎 代理

親展

親展 一八

明治廿七年十月八日 起草
同 廿七年十月八日 發遣

奉命

庶務課

主任

咨



政務局

通商局



外務省子爵瀧奥宗光

陸軍省大藏大臣若原義典

陸軍次官奥平昌高

外務省大藏大臣若原義典

外務省

本月十日付信人進身三九号ヲ以テ今
回ノ奉命ニ際シ海外ニ派遣ノ事
全部等ニ外交官ヲ付屬セシムル
必要有リ之ヲ付之者候中一
當ノ者四名大權定大蔵次官付
系係此ノ云ニ相シ系係公使
一等奉命官少尉大尉一等奉命
川原次郎一等奉命官鄭永昌

三石ヲ差出ルリ據定テ付回官等、
大和管付ヲ被命出浪等、以差支之
シ差先モ右ノ外交官トシテ差出テ次
才三付代日五、出浪等、據合ニ於テハ
當者ヨリ派遣スルト回條、請見、以テ貴
省於テ建込扱古外交、以テ回條、以テ建込

外務省



省 務 外

電受第四三二號 (明治二十七年十月一日午八時七分着)

至急親展

東京ハナレバク早ク御返答
ヲ希望ス

陸軍大臣
大山陸軍大臣

陸軍外務大臣

省 務 外

電受第四百四號 (明治二十七年九月五日午十二時十五分着)

鄭書記官東京ニ居ルヤ居ラネバ東京ニ
帰京ヲ命ズベシ其ノ来夕赴任前ナレ
バ牛之臣帰人迄滞京スベシ

陸島

陸軍外務大臣

林次官



電報 十月十五日午前十一時三十分 廣嶋

内閣

廣嶋

陸奥外務大臣宛

伊藤総理大臣

小村鄭ノ函書記官及荒川領事臨時必
要アリ本官ノ終大本堂ニ使用セラル、ニ行後
任又歸任ヲ要スルマテハ大本堂所在地ニ出
張ノ取扱アリタシ右出張中別段ノ支給ハ
大本堂ニ於テ支辨スル筈

内閣



暗號

明治 年 月 日 起
同 年 月 日 發遣



出 任

電送第三六
明治三十年五月五日
第一號

陸奥

陸奥外務之任

左ノ通リ傳之任一傳一曰

小村鄭某川ノ事ニ付テハ委細其地席

在スル井上喜次郎ニテキ合サルベシ

外務省



急
暗號



外務省

電受第四九〇號
明治二十七年十月五日午三時五分着

本官等大山大将隨行ノ名義ヲ以テ
三ノミテ同大將ハ明朝九時ニ地出テ
ハ故此候隨行ニテ宜敷ヤ至急鍋島ヲ
經テ電訓ヲ待ツ

鷹島

荒川領事

鄭書以カ

陸奥外務局長

5-1219





至急

暗號

廣島

廣島第三分署
明治三十四年十月六日
陸奥外務大臣

鍋島外務局記官

陸奥外務大臣

左之通井上書記官へ傳へし

時日迫り今日如何トモシ難シ故ニ荒川等ニ現
任ノ終ニテ兎モ角モ出張セシム委細ハ後日取
定ムルコトニナスノ外ナカルヘシ貴官ハ此一件落
着スルマデ其地ニ留リ指支ナシ

外務省





時子

右廣島

鍋島外務書記官 陸奥外務大臣

荒川鄭西宮大山大將ニ随行ニテ宣シ

電送第三七號
明治三十七年七月廿一日

外務省

5-1 2 1 9



意

暗號

外務省

電受第四九八

號(明治二十七年十月五日午後五時五分着)

兒王次官ト御相談ノ通リ大本營ニ官制
ヲ設ケルコトハ内閣ヲ不同意故ニ荒川等
朝又ハ轉任ノ必要アリテ現官ノ儘大本營
附ニ出張セシムヘシト内閣ヲ次議ヲ受ケ
リ右ニハ領事ノ定員ニ不都合生ズレト
思ハレ最良時日切迫ニ付右ノ按議ニ
應ジ可然哉御指揮凡迄荒川及ニ鄭
ハ出發ヲ見合ス

井上書記官

陸軍外務大臣

5-1219





明治 年 月 日
起草
日發遣

主任

暗號

電送第三五號
明治七年十月六日
三暗三本發

廣之島

錫島外務書記官

陸奥外務書記官

左ノ函井上書記官ニ傳ヘヨ

辭令ニ關スル貴官ノ考甚ク宜シアト

ヨリ伊藤伯ノ電報及ヒ郵便ヲ差出ス

外務省

バシ



急
暗
大
急

外務省

電受第五〇一
號
明治二十七年十月廿一日午二時五分發
御電訓ニ後ヒ荒川等今朝大山大将
ニ隨行出發セリ右ハ差當リ大本營附
命セ之出張中ハ相當ノ手當金ヲ支給
セラハコトニ大本營ト協議シテ本官ハ明
日帰官ナス

廣島

井上外務書記長

陸奥外務局長

急
暗

外務省

電受第五二八號
明治二十七年十月廿一日午五時四分發
荒川等ノ事件ハアノ終ニテ固シキヤ又ハ
何トカ別ニ方法ヲ設クルノ御意見ナルヤ兎玉
次官モ兩三日中ニ歸京スルニ付可成ハ夫レ
迄ニ當地ニテハ相談進メテ置キタレトコトナリ
吾ヤ返事待ツ

廣島

鍋島書記官

井上庶務課長

至急
暗号

本官

明治 年 月 日
同 年 月 日
日 起 草
日 發 遣

庶務課



主任

電送第...
明治三十年十月廿二日
午後三時四十分

廣島

井上廣務課長

鍋島書記官

荒川等ノ事件ニ付ハ別ニ方法
ヲ設ケル見込ナリ存人等ハ既ニ大本

外務省

管付ヲ余セシレシヤ世辭令振込

手アリタシ

至急
暗號



省外

電受第五三九號 (明治二十七年十月廿二日午後九時十分着)

菅原等ハ未ダ何ノ辭令モダサガ
ヨシ委細ノ事ハ思玉次官明後日出
歸系ノ上協議スルトノ事ナリ

廣島

廣島外務書記

陸奥外務大臣

省外



電受第五三七號 (明治二十七年十月廿二日午後八時十分着)

函外交官任命ノ儀色ハ之ノ入リ届
辭令書ヲ下付セズカ官一函ノ申出
ス帰系ノ上は相談スベシ

廣島天神所

メイキ楼

兎倉次官

陸奥外務大臣

明治廿七年十一月十二日起草
同 年 月 日發遣



主任

庶務課



電送第五三號
廿七年十一月十二日
外務省

陸軍省

電作案

井上外務書記長

廣島
縣外務書記長

在、同、大生系俱在、郡、副官、御、修、アリ

夕三

外務省

小村、荒川、郊、大、本、学、付、夕、波、常、名、有、令
及、手、出、生、支、給、等、に、関、る、事、を、必
要、と、し、其、文、面、を、電、報、ア、リ、タ、ト



憲 檢

省 務 外

電受第 六 五 三 號

明治二十七年 五月 三日 午前 九 時 十五 分 着

荒川等 辞令 奉 命 大 生 別 官 迄 奉
ハ 本 官 降 京 上 海 話 致 ス ベシ

鍋島書記官

井上書記官

省 務 外

電受第 七 三 七 號

明治二十七年 五月 五日 午前 三 時 十 分 着

小村、歸朝、承知ス。曩ニ總理大臣ニ

清君カシ 事務ニ老練ナル 高寺官六七

等 君クハ 判任、上位ニアルモノ 十名、同大

臣ト申合ハサシ 至急ニ 派遣セラレタシ

清 王 安 東 縣

山 縣 大 將

陸 奥 外 務 大 臣

石 廣 島 船 務 局 船 電 四 日 午 后 三 時 五 分 着

外務省

電受第七四三號

明治二十七年三月五日午後四時五分着

左三連り山翁大将への返電ヤリタシ

小村の成り文を速に帰朝ヲ命セラレタシ又伊藤總
理大臣へは申越ニナリタノ官更ハ民政廳官
制發布ノ上お当久物ヲ送ルシ

廣島

樫奥の務大臣

東京

林の務次官



次官

閣下

明治 年 月 日 起草
同 年 月 日 發遣

主任



電送第二二號 明治廿七年三月五日
午後五時十五分

安東縣

山縣大將

陸奥外務大臣

小村ハ成ル又速カニ帰國ヲ命セラレタリ又伊

藤總理大臣ハ反申秘ニナリタル事吏ハ民政

廳官割若希ノ上相書ノ人物ヲ送ルベシ

外務省

外務省

電受第七五〇號

明治二十七年三月六日午後二時五分着

昨日ノ山縣大將ノ電信ハ奥玉次官留字ナリ

ニテモ暗号ニ事支ナキヤ

陸軍省

陸奥外務大臣

東京

外務大臣

5-1219



外務省

電送第六二八號

明治廿七年十二月六日 發后三時四十分

加務大臣

山縣大將よりノ電候ハ平文ニテ参り共ハ略
早ノ所持ナシ上思ヒ昨日ノ電候ハ矢張り平
文ニテ送らる

林外務次官

豫高

館島外務書記官

5-1 2 1 9

0049

外 務 省

二十七年十月廿九日

安東外一軍民政務

小村兼理公使

陸奥外務大臣

由用者之至急帰朝之旨に於て其の山部
大將の都合を以て之を大將の差遣に任す
べし

二十七年十月廿九日

安東外一軍民政務
小村兼理公使

陸奥外務大臣

安東外

小村兼理公使

民政局長官の儀に付山部大將より大本營へ伺申
ノ事件相運に於て本官の出立を許すべしト
存右事件に速カニ運ブ様を祈行シ乞フ

外 務 省



外務省

二十七年三月廿日付表

安東島第一軍司令部 陸奥外務大臣
小村新理公使

貴官帰朝後山角大將が於て是存ナレバ
海軍水師艦隊の船隻等其地を占拠スル
ハ核攻メタシ

外務省

二十七年三月廿日付表

陸奥外務大臣 安東島
小村新理公使

福島中佐ハ奉命引継ぎ出費了了
中佐ハ解任シモ来月十日迄ニ其地ニ来ルル旨



外務省

電受第七七一號 (明治二十七年三月九日午後三時三十分着)
船津辰一郎ヲ民政廳ニ任用シテミトノ吉川
上中將ヨリ照會アリテ支ノ旨及ヒ該
料ノ高率ニ至急減額アリテ

東京
林外務大臣

陸奥外務大臣

外務省

電送第六四二號 明治廿七年十二月九日發

船津辰一郎
船津辰一郎ヲ軍差支十人ノ爲メ
生徒ナル故給料半ニ陸軍省ヨリ
手當給付スルアリテ

林外務大臣

陸奥
船津外務大臣

外務省

電受第七七六號

明治二十七年三月十日午後一時一分發

書記生船津辰一君の事務大臣認の上、由本
署付トシテ供申スルコトナリ先存月俸二千兩
ヲ作スルニ致シタリ依テ当地ニ出張シ令セシメ
之又出張旅費ハ当地ニ貯テ渡スル中、并一時
立寄支給アリ

渡島

大車掌別巻部

東京
林の事務次長

外務省

電送第六四四號

明治廿七年十二月十日發

留學生船津辰一君ハ明後朝其地ハ
向テ出張ス

東京

林の事務次長

渡島

大車掌別巻部

外 務 省

二十七年五月二十日午時

廣島

侍外務省

安東

山村 辨理 公使

本官下ロクインホリニ向テ出ル便船次知
帰ル

5-1219



明治 年 月 日
同 年 月 日
起草
發遣

主任

大臣令

電送第六分辦
明治二十九年九月

案東縣民政廳第一軍司令

福島大佐 陸真外務大臣

小村弁理の使長早基地ヲ出發セシヤ

即今何ノ地ニ居ルヤ由電ヲ乞フ

外務省

急

省務外

電受第八一四號 (明治二十七年三月廿一日午前十時五分着)

今朝着ス本營用アリ明日迄滞在明
後二十三日此地ヲ立ツベシ

彦島大倉町四村上房
小村 輝理 云使

陸奥外務大臣



省務外

電受第八一六號 (明治二十七年三月廿一日午前十時五分着)

本月十五日クヨシポヨリ 甲良丸ニ乗リ、ギョイントウ
向ツテ出帆ス其後ノモトハ合カシマ

安東縣民政廳
福島中佐

陸奥外務大臣



至急

外務省

電受第八二一號

明治二十七年三月廿三日午前十一時三十分着

今日此地ヲ立テ神戸ニ泊リ明日正午

神戸ヨリ流車ニテ帰京

小村 辦理ニ使

外務省 陸奥大臣

5-1219



至急 暗号

大臣

電報第六九四號 昭和七年五月十八日

大本營

川上中将

陸奥外務大臣

大本營附キトシテ派出スルキ三人
ノ官吏ハ何時ニテ其地ニ着セ
シメテ宜シキヤ直ニ回電ラセ

外務省



至急
暗號

外務省

電受第八二八號
(明治二十七年一月廿八日午後三時十二分發
明治二十七年一月廿八日午後三時五分着)
川上中將より外務大臣へ
派遣せらるべき三人ハ一月四日迄ニ此地ニ着
スル様旨命レアリタル

彦島

市園房

估之藤書江首

至急
暗號

外務省

電受第四四號
(明治二十八年一月二日午後七時三十分發
明治二十八年一月二日午後七時三十分着)
島村松方両首旨着ス

彦島

市園房

外務省
陸奥之臣

5-1219



廿八年一月十四日錄 主管 庶務課

第三〇四

在友邦各別地宜之通被似有昭々之宇
品港ヨリ走山丸ニ乗リ上之去後降之付ハ段
及出所也

明治三十年一月十日

松廣 具

公使館 秘書 友嶋村 久

外交友補 松方正 信

外務大臣 陸奥宗 大 殿

廿八年一月十五日 記 藤原 接 登

外務省

5-1219

宣

各通

公使館等書記官嶋村久

外交官補 松方正作

大本營附被免第二軍附被仰付

明治廿八年一月九日

大本營

外務省



廿八年一月十四日 主菅 庶務課

大東管 三三三

本友左社自去各被仕付
三山九二乗の言
昭和廿八年一月十日

昭和廿八年一月十日

非職社
外務大臣青陸五宗炎殿

札

通譯嘱託

三招行方

外務省

大東管 一月十五日

大東管附社受第二軍附被仕付

昭和廿八年一月十日

大東管

外務省

電受第一五五

號

(明治二十八年二月六日午後二時五分着)

貴官大本營附拝命ハ九月四日トコトナルカ辞

人之書ノ日附ハ十二日ミアラズヤ

大本營

大生副官

小村政務局長



5-1 2 1 9



広島大本營



昭和二十一年九月六日
外務省
広島大本營

大生副官

少村海防少佐

本軍大本營附事務官兼書記官
辭令書ノ日付ハ九月

四十一

外務省

5-1 2 1 9



外務省

電受第一六七號

明治二十八年二月十日午後四時四十五分發
明治二十八年二月十日午後四時一十七分着

東京

陸軍外務大臣

陸軍大臣

川上中將

安廣ノ下御配慮ヲ謝ス三橋ハ金州ニ必要
ヲ派遣シ難シ事ヲ御話シアリキ井上ハ如何
ヤ若シ之モ六ヶミケレバ閣下ノ御撰擇ニ任スル
外ナレ宜シク速ク御考案ヲ煩ス

外務省

電送第一一九號

明治廿八年二月九日發

青島

青島外務書記官

東京

陸軍外務大臣

左通、川上陸軍中將ニ傳ヘヨ
本大臣ヨリ種々談得シタトモ安廣秘書官ハ何
方派出スルヲ難シト野村内務大臣ヨリ亦難シ
ハ此際彼是推シ同答ニ日月ヲ暮ラズベキ時撰
ニアラザレハ在金州ノ三橋信方ヲ派出シ三橋
ノ後任ハ更ニ撰ルニトミテハ如何



電送第一三四號 明治廿八年二月十三日發

廣島

知事外務書記長 陸軍外務大臣

左ノ通り川上侍ノ事才將ノ傳

陸軍派出ノ官更ヲ種々周旋シタレド通當ノ人

見出サズ井上ノ福原陳政ハ支那學ハ元分ナシ

氏莫クハ不元分ナリ且ツ若年ニシテ軍事學

洞トモニハ稍々不安心ナリ故ニ第二軍ニ居ル島村

又ハ荒川ヲ派出シ其後任ヲ更ニ撰ハトシテハ

如何

省務外

電受第二一七號 (明治二十八年二月七日午時二〇分發 明治二十八年二月七日午時四〇分着)

東京

陸軍外務大臣

廣島 鍋島外務書記官

大本營ヨリノ命ニテ島村書記官歸朝

唯今此地ニ居ヤリ又同官ハ多分再ビ他ノ地

方ニ向ケ陸軍ノ途ニ登ルべシ但シ其前一寸

帰京シ得んヤモシラス

省務外

會計課

外務省

電受第三二二號

明治二十八年三月廿一日午後五時五分發着

下官昨年十一月ヨリ俸給金額支給ノ
事トナリタレバ同月ヨリ一般從軍文官増俸
令ニ因リ本俸五分ノ一増俸支給セラル
ベキ右金額至急送付願フノ旅行ノ
都合了折返シ候事願フ

安東縣民政廳
久水三郎

林次官

5-1219



次官

明治廿八年三月廿二日起草
同 年 月 日發遣



主任

林 次 友

電 信 課 長
安 東 縣 民 政 廳
久 水 三 郎 氏

函 電 案

電 送 二 三 言

明治廿八年三月廿二日
午後二時三十分

増 修 二 本 在 局 ヲリ 支 給 ス 入 キ モ ノ 三 冊
氏 政 廳 へ 申 出 下 ン

外 務 省



庶務課

外務省

電受第三三

四號

明治二十八年三月三日午後一時十分發

東京府外務局庶務課

當館在勤山崎高須西書記生及ビ
 領事館在勤速見書記生ハ支那語學
 生ヨリ出身ノ處此度總長殿下支那
 地方ハ同進言ニ付隨行致シ度旨願
 出タリ
 在モ山崎速見之兩人ハ當地ニ有用ナルバ
 之レヲ遣ス譯ケニ到リ兼ヌルモ高須書記生
 ハ差支ナキニ付隨行ヲ命ゼラレナバ當人
 滿足スベシ依テ其旨ハ協議アラシコトヲ
 望ム

京城

井上公使

陸奥之大臣

5-1219



明治廿八年二月廿三日
同 年 月 日 發 遣

主任

廣務課

通商局

次官 閱了

電報案

電送第四

明治廿八年三月三日
午後三時發

馬栗

仕系事務書記官

林外務次官

陸奥外務大臣へ

京城公使館在勤高洲書記生以
度總督官殿下敷地、御道等ニ
外務省

付道行政ニ度者願出タリ依テ大
本署ト協議ヲ請ヒ公使ヨリ
電報ニ接セリ右ハ大本署ヨリ所望
ナレ格別当方ヨリ大本署ニ道行ヲ命
セシメ度者依頼スルモ如何敷思ハレリ
依テ井上公使へハ本署ヨリ時調ヲ
請ヒ取計ヲ請ヒ月報及セリ為念御
自知ニ及リ

明治 年 月 日
同 年 月 日
日起草
日發遣

庶務課

主任

通商局

次官
閱了

電報案

電送第三九
明治二十九年三月三日
外務省

在京城

陸奥外務大臣

井上公使

貴館在勤高洲書記生總督

宮殿下ニ隨行ノ件ハ大奉答ヨリ

外務省

所謂王上レニ差支ナキモ當方ヨリ大奉

答ニ隨行ノ命セラレ度者依頼ス

ル下ニ難事計如何敷思ハ

外務省

壬午年三月三十日

三関

廣島大本營

陸奥外務大臣

川上中将

朝鮮國領事館速水同公使彼が森二口、
西人ヨ末松謙澄ニ居シ大本營より下シテ取寄
ヲ乞フ

外務省

壬午年三月三十日

廣島大本營

三関

川上中将

陸奥外務大臣

速水加藤二口ヨリ朝鮮東村上公使トキ者ノ都令
問合々見上テ何事ノ返答致スルコト

外 務 省

三月廿三日

京城

井上公使

三ノ関

陸奥外務大臣

其公使館ニ在勤ノ加藤二口及領事館ノ速水三六ヲ末松謙澄ニ屬シ大本營ニ下ナシタリ
川上中將ヨリ依頼アリモ存シテ承諾スル由
支ナキヤ否海軍軍令アリタリモ日ハ多ク大本營ニ
貸ス物ハニ當ラズ代リノ人ヲ海軍部アリテモ派遣
ニ難キ故其意ヲ強クハ敢テ上ニ返答アリタリ

外 務 省

三月廿四日 午後五時五分

馬関

京城

陸奥外務大臣

井上公使

当館ニ在勤ノ加藤二口及領事館ノ速水三六ヲ末松謙澄ニ屬シ大本營ニ下ナシタリ
リトモ其電ニ接ヤリ右ハ多ク三モ必要ノ人負ナ
レドモ今ノ場合不備ヲ思ヒ加藤謙澄ノ二人ト
亦ニ二口ノ代リトシテ支那語ヲ生出身ノ高州書記
生ヲ使シ渡ラズニ右ニテハ且夫存ナク本ノ事ヲ馬
関ノ譯スルキヤ又ハ江川ヲ待合サシムルキヤ何カ
スル由ニ越シテアリタリ但シ二口ハ海軍ノ事

外務省

二十九年四月一日午後五時五分

馬関

陸軍省加給大員

東洋

内田外務大臣

当館在勤速記員等出立大員等へ出立候にテ
モ差支ナキヤ否ヤ井上公使等ノ下向セシキ事
人々當彼必要ノ人物ニシテ差支ニテ難ク申事
上候不便ナキ事等ノ旨申上ルモ今更ニ此
差支ニテ大員等出立ノ旨ハ一層ノ切實ニ
申上ルモト認ルニテ右様御計ニシテ申事細
ク申上ル

外務省

二十九年四月一日午後五時五分

東洋

井上公使

陸軍省加給大員

大本營より日本者ノ官吏教多候に其ハタリ
此際其公使館に勤メ官吏ノ是派共候に
其ハ子ナラヌト云フ程ニテ其ハ將軍共公使館ノ
事務上差支ナキ限トシ大本營ノ要求ニ
シテ然ラズシ今一応は差支見出申事越
スル派員一ノ人ニテ其ハ由田外務大臣
ノモトに御用示アリ

通商局
庶務課
會計課

次官

至急
暗號

外務省

電受第四〇一號 明治二十八年四月三日午後七時三十分發
明治二十八年四月三日午後八時三十分着

在京城加藤高嶺西書花生ヲ總督府ニ使用ノ由
要キル(木取)取ニテ旅順へ派遣ノ義川上中將
ヨリ依頼ヲ受テ右ノ井上公使ト往復ノ未西書
花生ヲ派遣スルモ公使館ニ於テ更ニ増員ヲ要セザ
ル旨送答ニ接シタルヲ以テ本大臣兼議ニシテ
就テハ電信ニテ加藤高嶺西書花生ヲ直ニ旅順
へ出張ヲ命ゼラシメ且ツ旅順モ電信ヲ爲日ニテ
送ラシクシ

馬関
陸奥外務大臣

林次官

外務省

二十八年四月二日

馬関
陸奥外務大臣
京城
井上公使

大本營ニ當テ在勤員貸渡シニ案并ニ貴電
様ニヨリ加藤高嶺西書ハ案并ニ貴電
ニシテ但シ費用溢出ヲ其内一入ハ必ス返付スル旨
ハ領事館ニ必要トシテ本大臣營ニテ是
非共當人ヲ要スルハ貸渡スル旨由田領事一ヨリ
申出ス

外 務 省

二十八年四月言

廣島

了案

川上中將

陸軍外務大臣

京城公使館ノ加藤高州上(三〇ノアリ)ニ云ク派米スル
 一差支ナキトモ内スハ月事消法亦必ガ及ラサシタシ
 又遠水ノ派遣スルノ出米難キ方井上公使ヨリ返
 電アリテ就テハ差支レ夫レニテ法差支ナキトモ本人等
 フ何レハ差支出ラウトスベキヤ命令ノ趣令を以テ差支何
 右ノ由答アリタシ又本人等ヲ任地ヨリ呼返スル節ハ
 旅費ヨリ一ハ出方ニテ支出セラルル旅費トモシ



外務省

二十八年四月三日

多賀

馬場

陸軍外務大臣

川上中将

加藤高外、件、事、義、諾、ヲ、謝、ス、就、テ、未、
共、ニ、總、督、府、之、信、用、ヲ、見、込、キ、存、心、順、一、重、キ、派、
出、シ、命、セ、シ、キ、旅、費、ハ、血、汗、之、賜、也、於、テ、支、給、
ス、能、者、府、下、日、次、以、テ、出、給、ス、豫、定、ナ、リ

外務省

二十八年四月三日

馬場

馬場

川上中将

陸軍外務大臣

加藤及高外、件、事、義、諾、生、ハ、電、信、ヲ、以、テ、順、一、
出、張、ヲ、命、ジ、テ、日、次、以、テ、旅、費、ハ、血、汗、之、賜、也、
支、給、ス、能、者、府、下、日、次、以、テ、出、給、ス、豫、定、ナ、リ

晴

明治八年四月廿二日
同 年 月 日 起 草
日 發 遣

送

廣務課



政務局



主任

電送第三二號

明治八年四月廿二日

憲法草案

廣島

林外務次官

大本營

京城公使館在勸加藤高洲兩書記
生ヲ總督府ニ使用、趣令ニ旅順、派
外務省

米ノ義以上中將ヲ依頼ニ付、派米一
ニ致スニ就テ、兩書記生出張旅費、
憲法草案ヲ送ラレタシ

暗号

明治 年 月 日
同 年 月 日
起草
日發遣

管



廢務課



主任

電送第三二二號
明治廿六年四月四日
午後二時發

政務局



震枝案

京城

陸奥外務大臣

井上公使

貴館在勤加藤高洲兩書記生總
替府之使用、趣キテ以テ旅順、沈陽、
外務省

義川上中將ヨリ依頼ニ付該取、出張ス
ル様御金シマワタシ但シ右出張旅費
ハ大本營ヨリ電信為替ニテ送ルニキル
申通シ置キタリ

次官

庶務課
會計課

外務省

電受第四〇六號
明治二十八年四月四日 午後六時三十分着



加藤高次郎兩層記生ノ旅費ハ旅順ニ於テ渡ス
付テ兎モ角モ旅順ニ到ル様再計ハレタシ

大本官

副官

外務次官

5-1 2 1 9



明治 年 月 日
同 年 月 日
起草
發遣

主任

閣下

藤務

電送第二六六號
明治廿八年四月五日
午前七時三十分發

電報案

京城

陸奥外務大臣

井上公使

加藤高洲兩書記生旅費ハ旅順ニ

外務省

於ニ渡スニ付兎モ爾旅順ニ到ルニ本旨

大本營ヨリ回電アリタリ就テ右様御

取計アリタリ

庶務課
會計課

外務省

電受第四一四號
明治二十八年二月六日午六時三十分着
加藤高海西書記生今朝旅順へ向ケ
當地出發アリ



京城

井上公使

陸奥之臣

5-1219



明治廿八年六月六日通牒

明治廿八年六月六日 起算
同日 年八月六日 發遣

杉井

生



廢務課



送第一〇二號

海軍省 陸軍省 外務省

2

外務書記官

大寺管副官 兼

一等勲章 奉天川上 次郎 七名 左 奉天管付 等

余 妻 生 他 等 之 奉 天 管 付 入 員 存 在 於 此

會八年六月六日 陸軍省 陸軍部

外務省

形 之 依 り 奉 天 川 上 次 郎 七 名 左 奉 天 管 付 等

及 其 他 之 奉 天

奉 天 管 付 人 員 之 由 於 奉 天 管 付 等 之 奉 天

他 之 奉 天 管 付 人 員 之 由 於 奉 天 管 付 等 之 奉 天

奉 天 管 付 人 員 之 由 於 奉 天 管 付 等 之 奉 天

奉 天 管 付



廿八年七月十六日 總務課

主管 庶務課



● 第六〇〇九

勅書用紙の用紙は、
松方正信の履歴書寫に
あらずして、
第一層の用紙に
ありしを、

外務省
外務省庶務課

廿八年七月廿九日 陸軍省

第二軍司令部

5-1219



宣統元年七月廿七日通

明治廿六年七月廿六日起申
同 年 八 月 十 七 日 發 遣

主任

淨書 校正

庶務課

1217

送第一之

外務大臣事務庶務課

外務大臣事務部

庶務課送付件

庶務課送付件之必要有之 松方正作復

外務省

庶務課送付件之必要有之 松方正作復

庶務課送付件之必要有之 松方正作復

1217

第八師七月二十二日

主管 庶務課

第五八〇號

第五八〇號

一、高野、多、道、川、已、次
 外、支、友、補、松、方、正、次
 方、以、致、巧、名、後、及、子、送、附、付、也
 昭和八年七月廿七日
 第二軍司令部

外務省

中

第二軍司令部

5-1219

府 縣	東京府	所 管	外務省	官 姓 名	松方正作
	東京府		外務省		松方正作
住 所	芝區三丁目八番	職 名	外交官補	勳 等	從七位
族 籍	東京府華族			月 日	誕生年
摘		要		要	
<p>明治七年十二月廿六日大本營附七仰付 明治八年一月九日大本營附七先第二軍附被仰 一月十二日宇都宮駐劄全十六日清國盛京省 大連灣上陸金州駐劄一月廿一日金州出發 廿日大連灣接劄全廿五日山東省龍驤島上陸 全日二月十日免萊城縣吊山及威海衛等 戰鬪後事又二月廿日威海衛接劄全廿 六日盛京省大連灣上陸金州駐劄五月 十八日大連灣接劄全廿一日神戶上陸廿日解除 歸還七シム</p>					

將校戰時名簿

5-1 2 1 9



住所	芝區三田目口菟地	府縣	東京府華族
	職名	外交官補	所管
勳等	從七位	官姓名	松方正作
	月日	誕生年	
摘要		摘要	

明治三十七年七月二十四日左、勅諭ヲ賜フ、
 旅順公海海關門敵國ノ侍ニテ鎖鑰ト爲メ所令波等一兼テ
 之ヲ拔ク朕深々其功勞ヲ嘉尚ス漸次天恩ヲ前途尚遠ニ
 テ等其ノ谷自愛奉旨賜
 ○明治三十七年七月二十四日左、令旨ヲ賜フ
 我第ニ軍ニ於テ旅順口占領ノ趣、皇后陛下聞召サレ願御
 滿殊ヲ持枝下士卒、忠勇ナク深々御感賞ノ旨御沙汰
 ノレラレリ
 ○明治三十八年二月十七日左、勅諭ヲ賜フ
 威海衛、旅順ノ相順ヲテ清國ノ機關ナリ、汝等最モ旅順
 ノ後、其ノ平定ヲ致シ、今又威海衛ヲ陥レ、全ク敵國ノ破
 壞ニ畢ル、朕深々之ヲ嘉尚ス
 ○明治三十八年三月十七日左、令旨ヲ賜フ
 我第ニ軍ニ威海衛ヲ攻陥シ、全ク敵國ノ機關ヲ破壊シ、
 我皇陛下聞召サレ願御滿殊ヲ持枝下士卒、忠勇ナク深々
 御感賞ノ旨御沙汰ノレラレリ

將校職時名簿

5-1219



府縣 族籍	東京府士族	所管 外務省	官姓名 一等領事荒川巴次	位階 從六位	勳等 後六位	誕生年月日 安政五年十月廿日	要
	住所 東京市麻布本町町百三番地						
<p>明治廿七年十月 日第三軍附被仰付○十月十六日守品港被鋪全廿六日清國盛京省花園口上陸○十月六日七日金州及大連灣 戰開 從事○十月十二日金州政廳知事職務取扱ヲ被命○十月廿日金州 戰役 從事</p> <p>明治廿八年一月十六日金州城知事取扱ヲ免ス○一月廿日金州出發廿日大連灣被鋪同廿五日山東省 龍驤島上陸同日二月十二日 至 宋城縣 虎山及威海衛等 戰開 從事○二月廿五日威海衛被鋪同廿六日盛京省大連灣上陸金州 駐管○五月十八日大連灣被鋪同廿日神戸上陸同廿三日解除歸還セシム</p>							

將校戰時名簿

5-1219



府 縣	東京府	所 管	外務省	官 姓 名	一等領事	位 階	從六位	勳 等	後六位	月 日	誕生年	要	安政五年	月 日	十月廿日
	郡 籍		東京府 赤坂村町		職 名		領事		住 所		東京府 赤坂村町 百三番地				
<p>○明治二十七年三月廿五日左、勅諭ヲ賜フ 旅順ハ渤海關門敵國ノ持テテ鎖鑰ト爲テ所令汝等一舉 之ヲ拔ク 朕深ク其功勞ヲ嘉尚ス 漸次天寔々前途尚遠ニ 誠著其ト各自發奮勵ビ</p> <p>○明治二十七年三月廿五日左、令旨ヲ賜フ 我第ニ軍ニ於テ旅順口占領ノ趣 皇后陛下聞召レ願御 滿悅殊ニ將校下士卒ノ忠勇ナルヲ深ク御感賞ノ旨御沙汰 アラヒラレタリ</p> <p>○明治二十八年三月十七日左、勅諭ヲ賜フ 威海衛ノ旅順ト相順ナテ清國ノ關門タリ汝等最ニ旅順 ヲ拔キ其ノ罪ヲ毀テ令ニ威海衛ヲ陷レ全ク敵國ノ破 壞ニ畢ル 朕深ク之ヲ嘉尚ス</p> <p>○明治二十八年三月十七日左、令旨ヲ賜フ 我第ニ軍威海衛ヲ攻陷シ全ク敵國ノ關門ヲ破壊シタリ 趣 皇后陛下聞召レ願御滿悅殊ニ將校下士卒ノ忠勇ナルヲ 深ク御感賞ノ旨御沙汰アラヒラレタリ</p>															

將校職時名簿

5-1219



外務次官原 敬啟

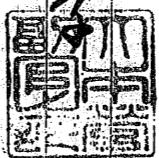
先有上等官及判任官にて大申之者
付人而せらる者ハ振舞大申之者ハ
一箇ト少申之者ハ申付之者ハ諸官ハ
大申之者より増加傳之者ハ其
前ハ人申之者ハ右諸官ハ申付之者
申付之者ハ申付之者ハ
明治廿八年七月廿五日



大本營

外務次官原 敬啟

明治廿八年七月廿五日
大本營副官人生定 敬



大本營

廿八年七月二十五日
主管庶務課



外
翻譯官陸奥廣吉別紙辭令書及
附候傳達方申取計相成度候
也

第六五八番

大正八年八月二日

警務課

(127)

早

一等領事 荒川 正次 経軍中 之 親
渡 調査 上 必 妥 当 之 旨 付 人 願 願
者 之 旨 之 旨 運 送 亦 年 分 以 後 乃 必 然
年 々 也

第二軍司令部



外務大臣官房

庶務課長

第二軍司令部

5-1219



廿八年八月二日發

空急

主營庶務課



第五〇六號

左記之人名戰地ヲ歸京之日
必要之有之處
至急ト取調之上申找相成度
及申依頼候也
明治廿八年八月二日

大 陸軍副官



外務省 中

大本營

一等領事 荒川 巳次
二等領事 久水 三郎
領事館書記 高洲 太助

荒川 巳次
久水 三郎
高洲 太助

0094

5-1219

五月五日
地有歸京之月日
上申申找相成度

月二日
軍副官部



中

大本營

領事荒川乙次
領事久水三郎
館書記生高洲太助

電行字

五月五日申時五分

荒川乙次昨夜十二時五分

乙次

乙次

5-1219



明治廿八年八月二日起

明治廿八年八月八日發遣

主任



浄書 幾原正原

庶務課



送第 一 號

外務省

大正營
陸軍別官部

呼名目ヨリ各々各々回名

荒川(水鏡)ノ事ニ關シテ
外三原
呼名目ヨリ各々各々回名

外務省

本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ
外三原

外三原
本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ

外三原
本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ

外三原
本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ

外三原
本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ

外三原
本ノ事ニ關シテ中務ノ事ヲ



急

一、八年八月三日續

明治廿年八月三日
同日發遣

主任



廣務縣



送第一四二號

外務省
廣務縣

牙二軍司令部

復曆了送付一件

其山川一由所中陸軍中一直接調寄必要

外務省

二付願應重了及送付在日下白の以て中

批了扱了案の多由所了と事

りるの及有一此所及回答

廿八年八月三日發
主管 庶務課

一軍發給三〇〇號

二五九四

政務局長 小村壽吉
二等 飲子 久水 三介
白 勢 書 江 生 加 藤 義 茂
領 子 銀 花 元 新 莊 順 貞
坂 本 重 平 中 二 隊 小 隊 長 小 川 久
有 一 之 官 至 急 當 部 一 八 八 運 行 中 隊 長
印 紙 之 派 用 紙 本 隊 以 外 他 隊 亦 有 之
昭和八年八月三日

第一軍司令部
第一軍司令部
第一軍司令部
第一軍司令部

第一軍司令部

5-1219



第九六號

廿八年八月七日

主管 庶務課

1921

第二軍司令部

一等 陸軍 少佐 山田 保永
 全名 三浦 昌之進 甘とる 奉 奉人、信 在
 名 下 宛 是 部 中 一 員 之 事 本 部 へ 送 付 申 上 申 出
 昭 和 二 十 八 年 八 月 七 日
 第二軍司令部 山田 保永
 外務大臣官邸
 庶務課長 井上 徳之助 様

第二軍司令部

5-1219

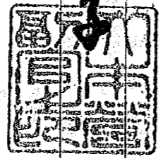


機密 第七號

日八廿八月

大本營

別紙小部公使館一等書記官以下
 各名之辭書拾壹通及古送月候
 進向也傳達方少取計相成度申
 進候也
 明治廿八年八月廿八日
 大本營副官大生宣
 外務次官原 敬殿



明治廿八年八月廿八日 菅 庶務課

機密 第七號

明治廿八年八月廿七日 菅 庶務課

別紙久水二等領事官一人及在
 方由取計相成度以後依款少也
 明治廿八年八月廿七日
 第一軍司令部
 外務大臣臨時代理長野西園寺公望殿



第一軍司令部

5-1219

件八年八月八日達瀬

明治廿一年 八月 廿四日 起筆
同 年 一 月 一 日 發遣

庶務課



土 蘭



一九

外務省庶務課長井上騰之助

在芝罘
二和候子之水之中殿

牙一軍師之先の事々々送付の件

本署より一軍師之先の事々々送付の件

外務省

本署より一軍師之先の事々々送付の件

ト

宣統元年八月八日

明治廿二年 八月八日 起筆
同日 八月八日 發遣

主任



廣務課



外務省 庶務課長 井上馨

在天津

一等事務官 吉田巳次郎

宣統元年八月八日 在天津 付

宣統元年八月八日 在天津 付

外務省

宣統元年八月八日 在天津 付

付



2

第九年八月八日

明治廿六年八月七日
同 年 八月八日 發遣

主任

廣務課

送第一〇四號

淨書
校正
淨

外務大臣 陸奥 外務省

存上海
松平 田村 已

松平 田村 補 牙 三 年 附 之 知 事 等 之 件

松平 田村 補 牙 三 年 附 之 知 事 等 之 件

外務省

松平 田村 補 牙 三 年 附 之 知 事 等 之 件

有 一 此 矣

明治廿八年八月八日

明治廿八年八月八日 起陣
同 年 月 日 發遣

主任



廣務課



二五

外務省長官事務官長官事務官

在在

特命全權公使林 幸次郎

郭某江某日之事務官長官事務官

外務省

外務省

長官事務官長官事務官長官事務官

長官事務官長官事務官長官事務官

宣統元年七月十八日 主官 庶務課



一軍發給三〇〇〇號

第一軍司令部

急

外務省に於て... 宣統元年七月十八日

外務省 庶務課



宣統元年九月四日

第一軍司令部

5-1219

明治廿八年七月十七日 起筆
同日、年八月、日發遣

主任

庶務課



奉印

外務大臣事務官庶務課長井上馨之助

外務大臣事務官長小村嘉太郎殿

件應書送付了、件

拝啟陳去來多々、戦中、件應書之用、義

外務省

省、この調製の上、送付の事、一軍別

官部、此等、本、この調製の上、固付有、

此、此、中、此、此、

明治廿八年六月二十四日

明治廿八年六月廿三日起草
同 年 月 日 發遣

行

主任



庶務課



送第一四九號

外務省

外務省

大在常則費大生等

等々行

小村公生等

外務省

内加

三

四

此

明治廿八年八月二十七日

明治廿八年八月廿七日
同 年八月廿七日發遣

主任



農務部



清書 檢正 原

3

在天津

外務省事務課

在天津

在天津

在上海

在上海

外務省事務課

外務省

外務省事務課

外務省事務課

三十一年九月二日 日書

明治廿八年八月卅一日起
同 年九月乙日發遣

主任

日書

6

一五七

外務省 庶務課

第一軍司令部

相懸書送付

在日之第一軍部員等之...

外務省

在日之新庄加藤兩軍江生...

中之係願懸書...

以爲之有...

寫...

此致

5-1219



宣統元年九月二日

主官 庶務課

宣統元年九月二日

新使館書記生加藤義三同高洲太郎
幸會書訂正方由申裁之趣了
取計別紙相成度及由裁候也
宣統元年八月廿一日

大卒管副官大生定孝



外務次官原 敬啟

宣統元年九月四日

大木 啓

5-1219

皇大書目録

明治廿六年 八月廿三日 起
同 年 九月 日 發遣

廣務部

主任



浄書部 檢定部

二五

長官 外務省 庶務課長 井上 謙

在東京

二等 佐多 久水 三 郎

在天津

一等 佐多 久水 川 巳 次 郎

同表ニ 久水 三 郎

中 佐 (男) 大 本 學 術 院 文 部 一 等 附 上 佐 付 (大 本 謙 三 郎)

皇大書目録

外務省

學 術 院 文 部 一 等 附 上 佐 付 (大 本 謙 三 郎)

及 村 謙 三 郎 等 有 一 等 附 上 佐 付 (大 本 謙 三 郎)

等

三

5-1 2 1 9

借入第九百四十一番

明治廿二年九月廿二日起
年八月八日發遣

主任

浄書
校正
原
浄
書

5

三十一

在町之系

外務大臣事務官長井上隆之助

町奉行事務官使林 甘等

事務官長井上隆之助

事務官長井上隆之助
外務省

免身二事附之仰付事務官長井上隆之助

生大市官附事務官長井上隆之助
事務官長井上隆之助

事務官長井上隆之助

明治廿九年九月廿二日

明治廿九年九月廿二日起草
同日發遣

主任

廣務課

廣務課

在上海

恒餘子 鈴田捨已殿

加藤君江生大在學府令免其職之付連

外務省

外務省

貴館存如仰子信書江生加藤君江生大在

學府令免其職之付連及在江生大在

江生大在江生大在江生大在江生大在

江生大在

廣務課

6

大正九年九月二十日

主管理務課



馬村

第一五九〇

第五〇一七三號

貴省領事館貴館記述大河係陸則貴省全初行政總附九時日附
ニ於ケル 熟練 調査ニ際シテ、人ノ履歴等及 経歴等入用ニ係リ、別
紙 綴形ニ準シ 記載ノ上、貴省 副官部ノ 内、由 現 在 任 相 成 務 以
及 保 護 他 也

昭和九年九月六日

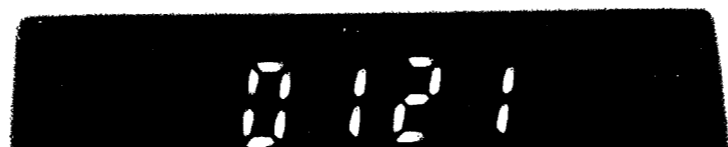
右領地總務部



外務省大臣官房

金州城行政廳

5-1219



昏例第三

用紙及濃紙又ハ軍紙罪紙

後歴昏

一 明治何年何月何日陸軍歩兵少尉ニ任じラル

一 同何年何月何日何々何々ヲシテ(命じラル)何地ニ出張何月何日何地

ニ於テ職掌シ或ハ何々ノ職ヲ兼シ或ハ云々ノヲ為シ何月何日何

地ニ轉着ス何々々々

一 同何年何月何日叙勲五等旭日章

一 同何年何月何日叙勲四等瑞寶章

一 同何年何月何日叙勲三等瑞寶章

右之通リ相違無之候也

金州城行政廳

年月日

所管職官位勲姓名

原籍住所ヲ精リ記ス

此後歴昏中叙後ハ朱書きス

肩例第三 用紙及漢紙又ハ洋紙等紙

経歴

明治何年何月何日何々何々(命セラレ)何月何日何地ニ到着何職何
官某ノ部下ニ在テ何月何日何々何々ノ職務ニ授ク其間何月何日何々ノ命ヲ
受テ何地ニ出張何々ノ事ヲ爲シ何月何日何地ニ帰着後命セリ何月何日
何々々々

何月何日何々何々何々(命セラレ)何月何日何地ニ到着何職何官
某ノ部下ニ在テ(何月何日何日何官或ハ何隊長何々ニ轉職シ後任何官
某ノ部下ニ在テ)何月何日何地ニ職務ニ授ク何月何日何地ニ
何月何日何地ニ職務ニ授ク何々何々ノ事ヲ爲ス何々々々

金州城行政廳

右之通リ相違無之候也

年月日

所管職官位 姓 名

直務長官宛

在籍住所ヲ精ク記ス必シ

明治何年何月何日何々何々(命セラレ)何月何日何地ニ到着何職何官
某ノ部下ニ在テ(何月何日何日何官或ハ何隊長何々ニ轉職シ後任何官
某ノ部下ニ在テ)何月何日何地ニ職務ニ授ク何月何日何地ニ
何月何日何地ニ職務ニ授ク何々何々ノ事ヲ爲ス何々々々

用紙及漢紙又ハ洋紙等紙

第八號九月二十七日發遣

明治廿八年 九月廿六日起單
同 年 八月廿七日發遣

主任



淨書

29

送第三號



在天津

外務省 天津 租界 長井上 騰 取

一等 候 子 荒川 已 次 郎

大河 平 重 郎 應 應 書 及 應 書 共 計 二 件

此 項 在 西 大 河 平 重 郎 生 子 二 軍 金 品 以

外務省

改 應 附 名 時 日 等 於 其 處 債 調 書 二 乘 之

在 人 應 應 書 及 應 書 以 用 之 自 身 姓 籍

形 之 準 之 江 載 上 牙 二 軍 別 官 部 之 事 也

与 右 領 地 從 督 部 民 政 部 之 照 存 有 之 事 也

加 取 物 在 人 之 所 在 事 以 為 調 製 者 為 改 在 者

之 事 也 有 之 該 籍 形 之 事 係 此 事 也

之 事 也

大河平書記生從軍履歷ニ関ス件

當館在勤大河平書記生第ニ軍金州行政廳
 附タル時日間ニ於ケル勲績調査ニ関シ本人履
 歴書及經歷書入用ニ付至急調製為政成送付
 可申旨占領地總督部民政部ノ照會ニ據リ該雜形
 宜被添九月廿七日付送第三四号ヲ以テ涉申越
 越了志即チ別紙ニ通奉人ヨリ差出被存茲ニ及御
 送付其旨查收有之云云將又同人ハ小官金州城
 行政廳知事トシテ在職中占領地行政事務草創
 ノ際部下ニ適當ノ人物少キニ依リ大山軍司令官ニ指名
 シ以テ採用方上申シ在勤地ヨリ來金致タル義ニテ
 爾來職務勉勵該廳務ノ端緒ニ就キ茲ハ同人ノ
 功勞殊ニ與リテ力アル次第有之故余勲績調査ニ
 就テハ前顯ノ事項參酌セシテ其様可然其筋ハ御申
 立相成度此段回答方申進致敬具

明治廿八年十月十二日

在天津

一等領事荒川巳次



外務大臣官房

庶務課長井上勝之助殿

追テ經歷書中宛名ニ義ハ本省ニ於テ可然御填入
相成度旨本人ヨリ申出被右為念申添也

五六〇一

履歴書

一 明治廿七年十一月廿四日在勤地朝鮮國釜山に於
て帰朝廣島迄大卒官へ出頭へ可き旨達せらる

一 同五年三月三日大卒官附令せらる

一 同日同日大卒官附ヲ免し第二軍附令せらる

一 同日廿三日金お着

一 同日同日金お味行政廳附令せらる

一 同日八年一月下旬茨木行政廳長官管六巡視
ニ付隨行令せらる

一 同五年五月廿日領地總督部ヲ金お置カレ金お味
行政廳ヲ廢シテ廳務ヲ民政部ニ移る

一 同五年五月廿九日領地總督部附ヲ免し帰朝令せ
らる

外務省

一 同五年五月廿日大卒官附令せらる

一 同五年五月廿七日大卒官附免せらる

存通大退金也

明治廿八年十月

山形縣山形市字老町三十一番地
士族

當時在清國天津領事館
領事館書記生大川守陸則印

経歴書

明治廿五年十月十四日在勤地朝鮮國金山に於て
急得於廣島大本營官に出頭不可有外務省より電
命下り同年十月三日廣島着即日大本營官附合を以て同
月十七日宇治出發の月廿三日占領地金山に到着し尔
果金山に行政廳付し之を金山に行政廳を專一專
領事兼司日次并に行政廳長官陸軍少将を以て
略下部下に在り庶務會計通譯を並せて清民に
弄えん及及階同の事務ヲ担任し其日長官
管下巡視之際隨ち命せし日八年一月下旬より二月
下旬に至る迄陸路旅順復城後子高野に赴き今年之
ケテ沿道清民に對せん諭告通譯其他民情諮詢等
從事より同年五月占領地總督部ヲ兼司せしむる

外務省

主務に引續き内務民政部に在り部長官不陸軍少
将ノ部下に在り前より職務ヲ執り
同上年十月より占領地總督部附り免し歸郷命せしめ
月廿四日大連灣より同船自山丸に便乘り之を馬弁に於
乘込軍隊中序列判病患者續若し之を二月下旬迄
停社療養を受けし日廿五日宇治に着し歸京乃々五月二十
二日附り以て大本營官附合を以て同月廿七日附り以て大本營官
附免せしめり

右に述ぶる通り也

明治廿八年十月

山形市字下町三十一番地士族

清原在清公三傳領事館

領事館書記之大塚平隆 印

詳考

送附 〇八 號

明治廿八年十月三十一日起草
同 年 八 月 八 日 發 遣



主 任



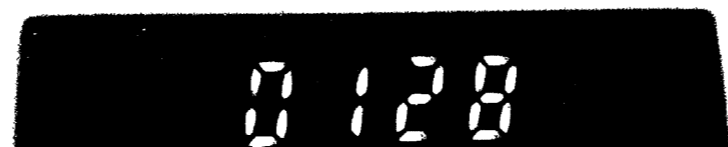
外務省官房庶務課 江川清寛 美

才二軍副官部 平

本年九月十日付石号占領地總督部民
外務省

改部 王 津 在 秋 領 事 館 書 記 生 大
河 本 隆 介 才 二 軍 全 部 行 政 社 付 夕 儿
時 間 二 於 夕 儿 熟 讀 調 査 二 案 二 本 人
ノ 存 心 二 本 及 練 磨 心 本 二 付 徵 収
上 表 計 二 及 其 後 可 見 依 於 有 二 案 存
在 王 津 着 川 本 領 事 二 及 其 云 云 二 又
令 般 日 領 事 二 別 紙 字 一 通 二 本 人
履 歷 心 本 及 練 磨 心 本 二 古 深 田 君 者 二

5-1219



支那の封入及署名年条之指印
支那の署名年条

外務省

5-1219

0129

④

郵便報知新聞通信員トテ渡韓シテ遅塚金太郎
ノ言行探偵方件

外務省

5-1219

0130